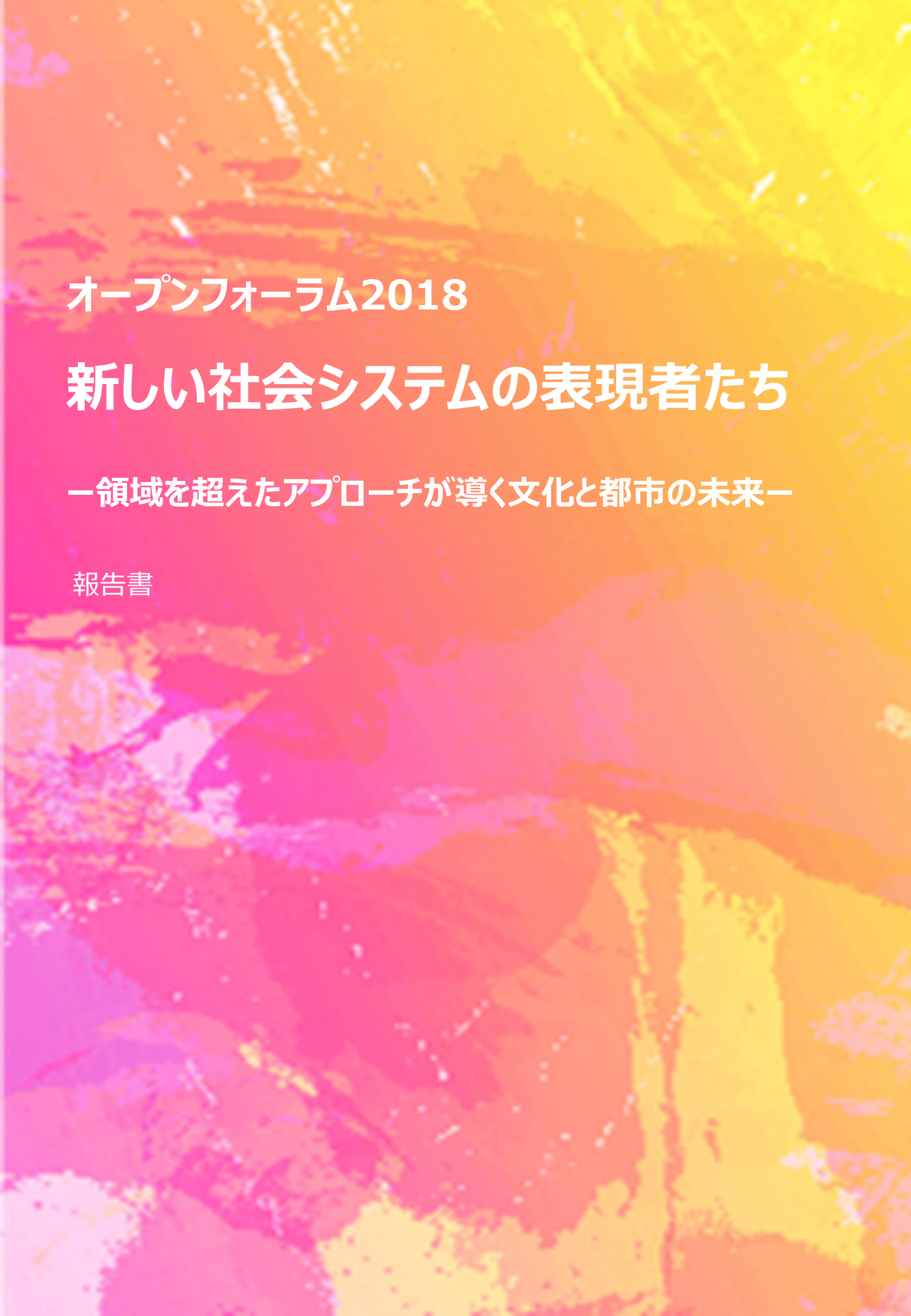




オープンフォーラム2018

新しい社会システムの表現者たち

ー領域を超えたアプローチが導く文化と都市の未来ー

報告書

目次

主催者挨拶	・・・ P3
第1部：オープニングトーク	・・・ P4
第2部：プレゼンテーション	・・・ P6
第3部：パネルディスカッション	・・・ P15

＜開催日時＞

2018年2月18日(日) 14:00-17:00 (13:30開場)

＜会場＞

スパイラルホール（スパイラル3F）

東京都港区南青山5-6-23

主催者挨拶

アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
オリンピック・パラリンピック文化戦略担当課長
石綿 祐子

私どもアーツカウンシル東京は、東京都歴史文化財団の中の1つのセクションです。日ごろは助成事業や、人材育成事業等で東京のさまざまな創造環境の支援をさせていただいております。今、最も大きな役割といたしまして、2020年に向けた文化プログラムの推進があり、課題山積ではありますが、2年後、3年後を見据えて実施しております。

また、あわせて、2020年以降の社会、あるいはその社会と芸術との関係がどうなっていくのか、私たちが求める新しい価値というのはどういうものなのかを予見しながら、今回の文化プログラムを検討していきたいと思っております。

そこで今回は、緩やかに既成の概念や活動領域を超えた新しい活動をされている方々のお話を伺いながら、2020年以降、あるいはその10年先、20年先の社会システムや、文化を通じた新しい価値創造といったものがどうなっているか、皆様と一緒に考えられればと思っております。ぜひ新しいアイデア、新しいヒントを今回のディスカッションを通じて皆様の現場に持ち帰っていただければと思っております。

第1部：オープニングトーク

スピーカー



芹沢 高志（P3 art and environment 統括ディレクター）

1951年東京生まれ。神戸大学理学部数学科、横浜国立大学工学部建築学科を卒業後、（株）リジョナル・プランニング・チームで生態学的土地利用計画の研究に従事。89年にP3 art and environmentを開設。とかち国際現代アート展『デメーテル』総合ディレクター（2002年）、アサヒ・アート・フェスティバル事務局長（2003年～2016）、横浜トリエンナーレ2005キュレーター、別府現代芸術フェスティバル『混浴温泉世界』総合ディレクター（2009年、2012年、2015年）、さいたまトリエンナーレ2016ディレクター（2016年）を歴任。

オープニングトーク

P3 art and environment 統括ディレクター
芹沢高志

現在、我々は非常に複雑な時代を生きていて、いろいろな状況が輻輳しています。そういう中で、人類の活動が地球規模に広がっていき、我々の精神や意識もそれに合わせて地球規模に広がっていくことが本当に必要なことだと思います。例えば環境問題1つとっても、意識のグローバル化というのがすごく求められています。その一方でいろいろな軋轢も生み始めています。世界規模で収入の格差、生活の格差が広がっていることも事実で、本当に深刻なところまでいっていると思います。

それに対して、例えばA Iとか臓器移植、あるいは惑星植民や宇宙進出、科学技術によって新しい未来、その可能性を開こうという意見も広くあります。ただ、私たちは2011年3月11日に未曾有の経験をして、それが「そうかな」というふうに手放しに同意できない気持ちもどこかにあります。また、そういう流れの中で世界中でこの数年間、政治の分野でもグローバリズム、あるいはそういったものに対する異議申し立てみたいな動きが広がってきたと思います。しかし、そういう難しい状況の中、世界を見ると、最近特に若い世代が少し違う独自の動きをしていて、さらに言えば実行することによって新しい可能性を切り開いている潮流も既に起きています。

今回は国内外4つの都市から4人の方をお招きして、その活動を紹介してもらいます。

皆さん 具体的なローカルな場所を拠点に持って、地域のコミュニティと非常に丁寧に付き合い活動を行っています。そして実際にそのコミュニティと丁寧に付き合いしていく中で、例えばアートとかデザインという領域から始まっていろいろなことをやらなければなりません。脱領域といいますが、越境していく、皆さんそういう現場にいらっしやいます。

アートとかデザインといったような、あるいは文化の1つの閉じられた領域ではなくて、社会システム自体をある種の表現の場として使っているのではないかと思います。それゆえ「新しい社会システムの表現者たち」というタイトルをつけました。

2020年にオリンピック・パラリンピックが開催されます。私は前回の東京オリンピックを10代の最初ぐらいに経験している人間です。よくも悪くも本当にこの町が大きく変わっていった、そういうことを経験しています。確実に1つの大きな波がやってくる。でも非常に重要なのは、その後、どのようにこの東京を魅力的な都市にしていくのかだと思います。それを今から皆さんと議論していくことがすごく重要ではないかと思っています。

第2部：プレゼンテーション

スピーカー



アリス・チャン・フワイ・シェン（張惠笙、Ting Shuo Hear Say共同代表/台南）

1984年台南生まれ。アーティストとして活動する一方、東アジア、欧州、オセアニアで小規模なイベントから大型フェスティバルまで多岐にわたるワークショップとイベントの企画と実施を手がけた。レジデンスサポートを受ける中で、数々のワークショップや地域と連携したプログラムを主宰。現在は台南を拠点に活動しており、リスニング、芸術、言説分析の教育に焦点を当てたコミュニティ・スペース「Ting Shuo Hear Say」を共同運営している。



フラン・エジャリー（Assemble/ロンドン）

1987年生まれ。ターナー賞2015を受賞した、ロンドンを拠点にアートやデザイン、建築といったジャンルを超えて活動する建築家集団Assemble（アセンブル）の創設メンバー。都市における多様性と共感を育む取り組みを通じ、社会に影響を与える建築、アート、デザインを発展させ続けている。



マイケル・ルン（デザイナー、アーバンファーマー/香港）

1983年ロンドン生まれ。共同都市農業プロジェクト「The HK FARMers' Almanac 2014-2015」や、深水埗の棚仔（Pang Jai）繊維街でのプロジェクト「Pangkerchief」を手がける。香港浸会大学の客員教師を務め、ソーシャリー・エンゲージド・アートの文学修士課程を指導している。研究対象は「Insurrectionary Agricultural Milieux（反乱的農業環境）」で、生政治・新自由主義といったグローバルな状況に対するローカルの反応から生まれる横断的な形態の農業。



ナカムラ ケンタ（日本仕事百貨代表、株式会社シゴトヒト代表取締役/東京）

1979年東京生まれ。生きるように働く人の求人サイト「日本仕事百貨」を企画運営。シゴトヒト文庫ディレクター。東京・清澄白河に小さなまちをつくるプロジェクト「リトルトーキョー」や「しごとバー」の企画・デザイン監修。2014年よりグッドデザイン賞審査員。2017年4月22日、誰もが映画を上映できる仕組み「popcorn」をスタート。著書「シゴトとヒトの間を考える（シゴトヒト文庫）」。

アリス・チャン・フワイ・シェン

Ting Shuo Say 共同代表/台南



私は台湾で生まれ育ったのですが、台湾の教育は日本と少し似ているところがあるかもしれません。レクチャーがメインの受身型であるという点です。ここ数年間でそれもだんだん変わりつつありますが、芸術・音楽の分野についてはまだ技術や技巧面に偏っており、多角的な考え方や社会連携、感情表現などについては充分とは言えません。

私は台南で、「Ting Shuo Hear Say」というスペースを2016年の7月に立ち上げました。Ting Shuoとは、「聞く」と「話す」という意味です。また他にも、「うわさ」や「誰かが言っていた何かへの評判」という意味もあります。私たちは、「聞くこと」や、「話すこと」を通じて、私たちのこれまでの経験、私たちが培ってきた集団的な知識につなげていこうと思ったのです。

このスペースは夫と一緒に運営しており、コミュニティスペースであり、また、教育のスペースと考えています。スペースは、元々家の持っている特徴を保ちながら、できるだけシンプルに改造してつくり上げました。主にパフォーマンスやワークショップなど、サウンドに関する活動を中心に行っています。スペースでは小さな図書室を開いて、さまざまな本を集めています。そして、さまざまな音楽レーベルを紹介するためのスペースも構え、実験音楽をここで聞くことができます。

私は、聴覚的なアート、そして即興音楽や実験音楽などの分野にわたって活動してきました。私自身はアートセラピーのバックグラウンドも持っています。この場を使ってさまざまな人と協力しながら活動を展開し、従来の伝統的な教育システムに反して、新しいアプローチを提供しようと思っています。

また、スペースは、アーティストでもオーディエンスの方でも、どなたでも歓迎しています。さらに、国外からアーティストを呼んでパフォーマンスをやってもらうこともあります。



実験音楽はまだ台湾ではとても新しい分野領域です。台湾は1989年まで法律が非常に厳しかったため、音楽とアートの多様なトレンドはそれ以降によりやく入ってきました。最初は社会における活動と感情的なレスポンスを引き起こすような音楽が多かったのですが、今の実験音楽は技術やプログラミングの知識を重視する傾向が見えてきています。台湾の大学の教育や制度から影響を受けているためではないかと思います。

私たちはステージを設けて演者と聴衆を分けてしまうのではなく、参加者を一同に集め、自発的なパフォーマンスや、演者・聴衆間の反応がすぐに生まれるようにしています。パフォーマンスの後には、できるだけ聴衆と対話することを心がけています。実験音楽は「よく理解できない」、「限られた人のためにつくられたもの」、「若者にしか向けられていない」という認識を持つ聴衆も多いですが、お互いに話し合うことや、経験をシェアすることによって広まるのではないかと思います。技術に関する知識がなくても、理解できるはずだと私は考えています。

例えば、その場にある音を出せるものを使って即興でパフォーマンスをするというアイデアで、携帯電話を使って録音をするワークショップを開催しました。特定の技術やその人が中心となるようなパフォーマンスよりも、さまざまな音楽の形を使いながら、誰でも参加できるようにパフォーマンスを展開することが大事だと思います。私なりに言い換えると、技術や形だけではなく、自分の今まで生きてきた人生経験を生かしながら関わることが大事だと思います。

また、コミュニティも大事なことの1つです。誰でも参加できるオープンディナーのようなイベントも過去に行いました。このようなコミュニティづくりは場所から生まれることもありますが、もう1つのコミュニティの形としては、いろいろな人が共通の目的を持ちながら集まり、コミュニティを形成するということもあると思います。

また、私は自分の活動を通して、人々は年齢とは関係なく自分の経験を共有したいという気持ちがあるのではないかと思います。聞くことも、語ることも大事です。でも、一番大事なのは聞くことです。話を聞いてくれる人がいれば、話してくれる人も必ずいます。そのような関わり合いから生まれる活動をこれからも続けていきます。

フラン・エジャリー

ターナー賞2015受賞 Assembleメンバー/ロンドン



私たちAssembleは、18人で構成され、建築、アート、デザインの垣根を超えて活動する団体です。Assembleでは、これらのフィールドの境界線をあえて侵していくような活動をしていて、一人ひとりの役割や肩書もプロジェクトに応じて変化させています。私たちの活動の基盤にあるのは、「よいまちとは、そこに暮らす人々が積極的にみずからの建造環境とかかわり合い、集団としてそれを構築、運営できるもの」という考えです。私たちはまちに暮らしている人々と、そのまちの構築を管理している人との間にある溝について日々、探究しています。現在も続けているグランビーでの活動について、幾つかお話ししたいと思います。

グランビーはリバプールの南にある地域で、テラスハウスが列をなして並んでいます。リバプールの港町としての重要性が失われていった戦後、失業率の増加と人口の減少により経済的にも社会的にも厳しい状況が生まれました。1981年には暴動が起こり、警察による人種差別と経済的機会の不足に対するデモの様子が、この地域のイメージとして定着してしまいました。その後 20年間、次から次へと立てられた再生計画はトップダウンによる強引な計画でした。人々を立ち退かせ、建物は取り壊され、それにより地域を再出発させる人々も課題もよそへ追いやってしまったのです。

20年間をかけて徐々に計画が進められた結果、残念ながらテラスハウスが現在も残っている通りはグランビーの14ある通りのうち4つのみとなりました。それでもわずかながら残った住民は次第に手を取り合い、まちを取り戻し始めたのです。

まず、住民たちは掃除やガーデニング、ペンキ塗りなど、家の中で行うような作業をそれぞれの家からまちなか、公共エリアへと広がっていきました。周りに自分たちの存在を示し、直接働きかけていったのです。まちを白紙にされてしまったからこそ、人々は自由な形で主導権を握ることができました。監視の目もなければ、関心も向けられていなかったからです。

まず、住民たちは掃除やガーデニング、ペンキ塗りなど、家の中で行うような作業をそれぞれの家からまちなか、公共エリアへと広がっていきました。周りに自分たちの存在を示し、直接働きかけていったのです。まちを白紙にされてしまったからこそ、人々は自由な形で主導権を握ることができました。監視の目もなければ、関心も向けられていなかったからです。



彼らの目指す再構築は、強行計画や固まったビジョンではなく、多くの異なるグループや個人、住宅協会や団体が関わることができるアプローチでした。そこで「コミュニティ・ランド・トラスト」をつくり、数々の空室をコミュニティ活動のために使える場として改装することになりました。同時に私たちは、地方議会への働きかけなども手伝いました。実際のプロジェクトは小さなスケールのものをつなげていくというもので、徐々に拡大していくアプローチでまちを再構築していきました。

グランビーでの活動で1つ難しかったことは、まちの再構築をどのように社会的・経済的な状況とつなげていくかということでした。そこで、これまでのプロセスから一旦離れ、「グランビー・ワークショップ」を設立し、この地域に新たなビジネスをつくと同時に、地域の文化でもあるグループでのクリエイティブな活動と町の変化を継続して支えられる場をつくったのです。

始まりはたった10戸の改装でした。単純な改装ではなく、それぞれの家の状況に応じた補修と対応を行いました。全体的に建物の状態は悪かったのですが、時にはあえてそのダメージを残すことで、それをうまく使ってよりよい空間をつくれなかと考えました。例えば、部屋の天井が抜け落ちていたのをむしろ逆手に取ってアーチ型に残したり、最悪な状態にあった2つの家を合わせてコミュニティスペースにしたり。歴史も残しつつ、住民や地域が乗り越えてきたことも空間に刻み込みながら、新たに自分たちのものにしていくというプロジェクトです。

その後、ウェブサイトから「グランビー・ワークショップ」を通して作られた商品を買えるようにすることで、さまざまな人がグランビーの変化に投資できるようになりました。商品は全てハンドメイドですので、型にはまったやり方もなく、あえて偶然や即興、それから実験によって変化が生まれるようになっています。私たちはこれらの実験や手づくりの概念が、それがたとえドアハンドル、取っ手のレベルであろうとまちの修復であろうと、自分のまちへのかかわり方に深く関係していると考えています。柔軟だからこそ楽しめる、そして可能性にあふれるのです。

さらに、「ウィンターガーデン」、「コミュニティガーデン」というスペースがあります。このプロジェクトは、クリエイティブな活動と現在進行中のプロジェクトを組み合わせることでできています。この2つのエリアをつなげてコミュニティスペースやミーティングスペースをつくったのです。ミーティングスペースでは収益や管理に関するミーティングを行い、それと同時に、アーティストや地元のパフォーマーもこのスペースを使って活動を行っています。これらは、現在も進行中のプロジェクトで、多くの人に関わることによって、違ったインスピレーションが得られます。これまで少しずつですが進歩していますし、これからもそうあることを願っています。

私たちが手応えを感じた仕事には、共通点があるように思います。何か人々の生活に変化をもたらしたいと思ったらその人の話を聞き、経験してきたものや想像に敬意を払わなければいけません。私たちの価値観や目標、リソースを手に入れる権利、そしてどのような場でどういうふうに行動するのかという考えにも全てつながっていくのです。デザイナーとして、またはアーティストとして、コミッショナーとして、多角的、批判的に考え、人に優しいまちにできるのかを考えることが私たちの役割だと思います。そして、それをどうやって自分の個人的な動きに入れて関わっていくのか、そしてどうやって結果につなげるのかも考えなければいけません。

私たちはあえて役職などをなくし、活動をしています。最近では政治的な意味合いについても議論し、集団としてどういふうに世界と関わっていくのかということも考えるようになりました。プロジェクトにおいては、多様性とさまざまな声への敬意にもとづき、Assembleという集団としてのあり方が示されているように思います。結局のところ、私たちが目指しているのは対話と自己実現のための場を作り出していくことにあるのです。

マイケル・ルン

(デザイナー、アーバンファーマー/香港)



私はデザイナーとアーバンファーマーをやっています。また、客員講師もさせていただいています。香港に越してからもう8年ぐらい経っていますが、ロンドン生まれ・ロンドン育ちです。そしてニューヨークへ越して、都市農業で仕事をしてきました。さまざまな屋上農園を開いたり、知人と一緒に雑誌も作ったりしてきました。

まず、香港の社会的・経済的な状況についてお話ししたいと思います。東京と同様に労働時間が非常に長いですが、香港の法律上の最低賃金は東京の半分ぐらいです。香港の人口の20%は貧困層にあります。香港の賃貸料は世界で一番高いと言われています。

今日は、主に3つのプロジェクトについて話していきます。

まずはマンゴーキングについてお話ししたいと思います。

マンゴーキングはホームレスであり、ゲリラ農業をやっています。私は彼と一緒に数年間活動をしていました。彼は橋の下で暮らしていて、使われていない空き地で知人と一緒に農業を行っています。最初、そこは土壌がとても悪い状況だったのですが、彼は自分自身の排泄物を肥料として与え、農業が出来る土壌へと変化させました。彼が始めた農園を広げるために、私も協力を行ってきました。これまでサツマイモやパパイヤの木、そしてオクラなどさまざまなものを植えました。残念ながら時に政府から立ち退きを迫られたりすることもあり、その度に場所を変えて農園を継続してきました。私自身も彼から多くのインスピレーションをもらいました。



2つ目に紹介するのは、香港の北西にあるワンチャイという農村です。開発された住宅のビルがありますが、政府が元々そこで暮らす村人を立ち退かせ、そこに住宅を建てようとしたのです。2年間ずっとこのようなトップダウンの開発が進められています。村の中にあるバナナ農園も、開発が進められているこの2年間手付かずで放置されたままです。この村の中では、ジャックフルーツという木を植えている人がいます。去年の7月、私は村の人々と一緒に「ジャックフルーツ・フェスティバル」というイベントを開催することにしました。最初の目的は、いろいろな人を招いて、村で起きていることを認識してもらうことでした。ジャックフルーツ・ウーマンという

キャラクターを作ったり、イベントのために地図を作ったりもしました。一番面白かったのは、このような抗議に参加しないような村の人が積極的に楽しみながらイベントに参加して、大企業による村の開発について一緒に考える機会を持てたことです。

最後に、私たちのプロジェクトについて話をしたいと思います。これは2年前から進めているプロジェクトで、油麻地というところで屋台を開きました。香港では家賃がとても高くなっているため、2年スパンで多くの店が閉鎖してしまいます。しかし、幸いなことに現在このプロジェクトは2年間は継続できています。一般的に、屋台は金属でできた小屋のような形をしていて、その場で開けたり閉めたりすることができます。しかし今日、政府の取り締まりの強化によって、その風景も次第になくなりつつあります。2015年から知人と一緒にこの屋台を使える機会を得たので、コミュニティスペースとして使わせてもらっています。具体的に説明すると、屋台をリサイクルショップとして使って、さまざまな人と交流を深めるためのスペースとして使っています。

また、取り締まりの強化により、以前は屋台があった場所が空き地となりました。私は知人と一緒に、ここで農業を始めてみました。そこでは屋台の骨組みが残ったままだったので、できるだけ生かすことを考えました。私たちはここを公共の場として再構築することが重要と考え、その空き地を生かしていこうと思いました。そこでまず、「コミュニティガーデン」を始めました。

ガーデンには寄付してもらって育てた約20種類の植物があって、その3分の1ぐらいは食べられるものです。近所の方がいつも水やりに来てくれたり、よい肥料となる、米の研ぎ汁をくれる人たちもいました。さらにエヴァという近隣の住人は、遠くの花屋さんまで行ってここに植える植物を買ってくれました。子供たちも水やりなど手伝ってくれました。

けれども残念ながら政府による取り締まりの強化のため、植物を移動するように命令されました。今は、プロジェクトをその次のステージに進められるように計画をいろいろと練っています。

2017年に私は宮下公園のスペースにまつわる問題についていろいろ学ぶ機会があり、オリンピックに向けて開発が進んでいることについても聞きました。これはオープンな形で進めることが大事な話だと思っています。私たちは地球市民として、まちの開発にできるだけ積極的に参加することで、トップダウンによる都市計画に対してできるだけ意思表示をし、次の世代もより良い環境で暮らせるように努力する必要があります。できるだけ積極的に、大きな集団の一員として、いろいろな動きに参加しながら努力する必要があるのではないかと思います。

ナカムラケンタ

(日本仕事百貨代表/株式会社シゴトヒト代表取締役、東京)



僕はいろいろやっているんですが、そのひとつとして求人サイトを運営しています。まずはそれが始まった経緯をお話したいと思います。

まず、皆さんにとっていい場所とは何だと思いますか。僕は、この問いをずっと自分に問い続けてきました。なぜかというと、もともと親が転勤族だったので、ずっと引っ越しを繰り返していました。実家はあるのですが地元がない。それで、自分の居場所をつくりたいという思いから、まずは建築家を目指しました。それで建築を勉強し、不動産の会社に就職しました。僕はお酒がすごく強いわけでもないのですが、その頃 週6日通っていたバーがあって、そこにはベッキーというバーテンダーが居ました。彼のところに行くとか何とか落ち着くし、帰り道に寄りたくなる。週6日通う理由は、よくよく考えてみると、人なんじゃないか。つまり、僕はバーテンダーのベッキーとか常連の皆さんにお会いして話したりする、それがすごく楽しいんじゃないか、それが一番の目的なんじゃないかと思った訳です。

いい場所には人がいるんじゃないかと思いました。その場所に合った人が働くと、皆さん生き生きと働きますよね。生き生きと働いている人がいる場所はいいい場所になる。それで人と場所をすれ違いなく結びつければいい場所がどんどん生まれていくんじゃないかと思ったんです。それで求人サイト「日本仕事百貨」をつくりました。



いろいろな仕事を紹介していますが、全て現地で話を伺って、仕事の大変なところもしっかり伺う。それを、ひとつひとつじっくり丁寧に紹介しようと思っています。僕らがこの求人では一番大切にしているのは、会社だったり働く人たちが一番大切にしている根っこ、それを取材で探り当てて紹介するように、その1つをちゃんと届けられるようにしようと思っています。

例えば、東京の蔵前にある「カキモリ」という文房具屋さんの募集をしました。ここの代表の広瀬さんは、もともと実家が文房具屋さんでした。自分で文房具屋さんをやるなら何か変わったことをやろうということで、例えば自分のノートをその場で作れたり、留め具とか表紙とか、中の紙とかを全部自分で選んで、その場で自分だけのノートを作れるようにしたり。それから、色を調合して自分好みのインクをその場でつくってくれるインクスタンドを併設しています。「今、文字を書くのも実際にペンを使わない瞬間が増えていきます。けれども

逆にいうと、ペンを使うときもまだ残っているんです。例えば手紙を書くとき、そういうときこそ自分の気に入ったペンやインクで手紙を書きたい。今だからこそ、そういう書く行為の価値が相対的に高まっている。」という広瀬さんの思いや言葉も求人でお伝えしました。

ほかにも北海道から沖縄まで日本全国、また最近は海外の求人も紹介しています。そうやって僕はいろいろな人と場所を結びつけていくことをしてきたんですが、やはり自分も場所をつくりたいという思いが生まれて、「リトルトーキョー」という場所をつくりました。これは虎ノ門ヒルズの横にある再開発予定地の場所をとっても安く貸していただき、開発期間までは自由に使っていいよと言ってもらえたので、もともと寿司屋だった場所と空き地と細長いペンシルビルを一体的に全部「リトルトーキョー」にして、そこで最初にやったのが「しごとバー」というものです。

「しごとバー」ではいろいろな人・職業の方に1日バーテンダーになっていただき、話をさせていただきます。文字でもなく、今日僕が話しているようなトークショーでもなく、会話することにより人となり伝わって、この「しごとバー」に来て自分も何か始めようというって始められた方が、今度は1日バーテンダーとして戻ってくるみたいなことが起きています。やはり衝動みたいなものが伝わって、自分の中にもその衝動が生まれるのではないかなと思います。今は再開発が進んだので、リトルトーキョーは清澄白河に移転しました。本当にいろいろな生き方、働き方があるのだということを求人サイトや、「しごとバー」を通して伝えています。

第3部：パネルディスカッション

パネリスト

アリス・チャン・フワイ・シェン（張惠笙、Ting Shuo Hear Say共同代表/台南）

フラン・エジャリー（Assemble/ロンドン）

マイケル・ルン（デザイナー、アーバンファーマー/香港）

ナカムラ ケンタ（日本仕事百貨代表、株式会社シゴトヒト代表取締役/東京）

モデレーター

芹沢 高志（P3 art and environment 統括ディレクター）

パネルディスカッション



パネルディスカッション

芹沢高志[以下 “TS”] 4人の方は今日初めて知り合ったということですから、最初は、自分以外の人たちのプレゼンテーションにどのような感想を持ったか、あるいはもう少し聞いてみたいことがあったら、そこから話を始めたいと思います。ではプレゼンテーションの順で、アリスさんからお願いします。

アリス・チャン・フワイ・シェン [以下 “AHC”] すごく刺激をいただきました。私がノートにとった言葉をここでシェアしたいと思います。活動、力を与える、価値、人間、公、抗議、いい人間、対話、そしてcomfort（快適）ですね。何をやるかは関係なく、逆に自分の個性が一番大事ではないか。他者とつながりあう主体は、人間にほかならない。それが重要だと感じました。

台湾では図書館が人間ライブラリのデータベースというものを作り始めています。まるで本を借りるように人を予約し、対話をしてその人の経験などを学べるというシステムです。このようなオープンな態度をとっていろいろな人と接すれば、さまざまな点と点がつながり、コミュニケーションを生んでくれると思います。このようなつながりは、そこに参加している人たちに力を与えることだと思いますし、その中ですごく豊かで、すてきな社会ができ上がるのではないかと思います。



フラン・エジャリー[以下 “FE”] すごく面白かったです。いろいろ共通の目的があるように思いました。人間としての経験が重要視されていると感じます。例えばアリスさんが実際に対話ができるような場を設けていると話したように、私たちは全員、人の経験や話を聞くことが大事だと思っているのだなと思いました。つまり、私たち全員がやっている活動は、さまざまな人が対話を出るような場を創り出すことが、共通の目的ではないかと思います。もう1つ、物語、ストーリーテリングの重要性が面白かったと思います。私たちの仕事も、パフォーマンスというのがどのような形になっているかということをいろいろ考えさせられました。

マイケル・ルン[以下 “ML”] とても面白かったです。いろいろと聞いたことのない話も聞けましたし、その中には共通点があるのではないかと思います。

フランが話したように階層というものをなくすことも、そして集団として決断をすることも大事だと思っています。それは私たちのグループの中での共通点ではないかと思っています。そして、多くの場合は政府の代わりに仕事をしている感覚を抱くこともあります。オルタナティブな教育を提供したり、それを聞いてこのような場を設けたりすることでお互いに刺激を与えあうことができると思いますし、また、このディスカッションや対話をすることで学ぶ意味も多くあるのではないかと思います。より気軽に自分の意見を発言できるような場づくりが大事だと思っています。

ナカムラケンタ[以下 “KN”] 僕は皆さんに質問したいなと思っています。

皆さん、トップダウンじゃなくて参加型みたいなことをおっしゃっていたんですが、本当に自由に、どこでも、誰でも、何でもやってもいい感じなのか。それともその場所にはある種のルールがあるのかどうかをちょっと聞いていいですか。

AHC) 個人が集まって集団を作り、その集団としてひとつの意志を持って活動していますよね。だから、グループの中でディスカッションを行うことはとても大事です。ディスカッションを通じ、お互いの考え方やエネルギーについて共有することができます。グループディスカッションをいつ終わりにするかなど、時間をいつ終了にするかというのは集団的に決めるものだと考えていますが、主催した人が「そろそろ終わりにしましょうか」という役割を担うことももちろんあると思います。

FE) どこで線引きをしますか？ 私たちのプロジェクトにおいては、内部的な取組みか、外部的な取組みかによってちょっと違うと思います。

内部的な取組みについて、まず私たちAssembleは階層のない集団ですが、構造がない訳ではありません。なので、3ヶ月単位で役割をローテーションします。責任を分かち合い、集団の中でいろいろな役割があることも理解しないといけないと考えているからです。5時間かけてミーティングを行うこともあります。いずれにしても、コミュニティに対して言いたいけれど耳を傾けてもらえないような言葉を埋もれさせないことです。対話ができる場がもっと必要だと思います。例えば、普段発言できない人のための場を設けたり。

ML) 5時間もかかるようなミーティングの代案として、1つはタイムラインやデッドラインを引くことで、実際そうした時間的制約の中で行わなければならないようなイベントがあります。そこに辿り着くまでの曲がりくねった道を行く旅のようなものではないかと思っています。



フォーマルな形で行われるものではないと思います。例えば一緒に暮らすことや一緒に食事をするのも、そのための方法になるかもしれません。トイレや歯磨きの最中に何かを思いつくこともありますし。しかし、これは特殊なシチュエーションですね。都市計画に関する話は、非公開のミーティングで行われることが多いですが、必要に応じて時間的制約の中で、フォーマルでないミーティングを行っても良いのではと思います。

TS) ナカムラさんご自身は、どうお考えですか？

KN) その場をつくった後に、ルールというほどではなくても、工夫をするみたいなのもあると思います。より対話が進む、会話が進む、自由にいろいろなことが起きる、そのために何か工夫はできると思っていて、できる限り、終わってもしばらくその場にいられるような時間を設けるというのはよくやっています。そうすると、その本番では話さなかった人たちが後から、「実は…」という形で会話を始めることがあります。そういう余白をつくるようにはしています。



TS) 人の話を聞くということを皆さん大事にしているんだなと思いました。若いときというのは割と、誰もが自分の意見を人に伝えることをすごく大事にしてしまうし、自分のプレゼンテーションというのが非常に強くなってしまう可能性もあると思いますが、皆さん、若い世代なのに他者の話をかなりじっくり聞いて、それぞれ自分たちの行動にそれを生かそうとしているところに共通点があると思いました。

人の話を聞くのは時間がかかりますよね。その中でそういう余白の部分などを、どれくらい許容できるのかというのが、みんなそれぞれの場所で工夫されていることかと思いました。

特に都市計画は、いろいろな人間がたくさんいて、何も同じことを考えている人たちばかりではありません。そういう人たちの中で建築とかそういったものができ上がっていくと、自分たちの未来が形づくられていくわけじゃないですか。そういったところに皆さんの活動なんかも関与していくことになるから、それを使っていく人たちどう合意しながらその場をつくっていくのかというのがすごく重要になってきます。実際に使っていく人たちといつも対話しながらつくっていくというのをすごく感じました。

FE) リバプールに住んでいる女性が書いた素敵な詩があります。「ごみ箱を置くところがない」という内容なんですけど、その中で出てくる表現に、「私たちが暮らすための最善を知る人々」というのがあります。そのコミュニティ自体が不安定になっているときに、人はどのようにすると改善できるか、場をどのように違った方法で活用するか、どのように生きていけばいいかという話をたくさんします。聞くこともすごく大事だと思います。さっき話題に挙げた、時間というか場にまつわる話もそれにつながると思います。

TS) いろいろな人たちの住んでいる都市に働きかけているマイケルさんは、フランさんの指摘したようなところに、何か感じるところがありますか。都市の中で不特定多数の人たちに関与していくうえで、いろいろな人たちと対話をしていくこと、それがマイケルさんが一番大事にしている部分ではないかと思ったのですが。



ML) はい、その通りです。香港は人口が非常に多くて、さまざまな問題を抱えています。その中で先週、春節の時期を狙って企業が住民を立ち退かせたという事例がありました。皆が休みのときに立ち退かせたというのはひどい話です。新しい居場所を探すのはとても大変で、住民たちは集まってミーティングを行い、そこに私も参加してみたんです。

その後、私も実際に抗議活動に5分ぐらい参加してみましたが、自分なりの形でその手伝いになれたのではないかなと思っています。5分だけでも活動したり、寄り添うことで、新しい変化をもたらせるのではないかと思います。

TS) 例えば、すごく対立しているようなものの中の間に入って行って、いろいろな人たちの考えをいい方向に持っていく、あるいはその流れをこっちに変えていくという場合もあると思います。アリスさんはいろいろなミュージシャンを呼んで即興の音楽を演奏するとき、臨機応変にそれを1つのものに、いい方向に持っていこうとしますよね。つまり、ご自身のアートワークと、それからその場を運営しているということが、関係していると思いますか。



AHC) 関係していると思います。グループの中で自分の個性を発揮することもあると思いますが、グループに合わせていくような要素もあると思います。例えばTing Shuoについてのプレゼンテーションをする際、聴衆がそもそも実験音楽に興味のある人たちであれば、今日とはちょっと違う雰囲気になると思います。合わせるというよりもコラボレーションというか、共存という感覚が近いと思います。単一の味に塗りつぶしてしまうことなく、お互いにその人の側面やそれぞれの歌を味わいながら、1つのものにしていく。台湾の教育においてもこのようなコミュニティを大事にするところがあります。グループの一体感を大事にするところがあると思います。

私はオーストラリアで勉強していましたが、個人主義が中心です。それも生かしながら活動をしていこうと思っています。個人主義は先ほどの考え方と対立するものではなくて、共存できるものだと思います。グループを保ちながら、同時にその中で個人が自分の個性を保つことはできます。

TS) 面白いですね。では、また1つ質問。皆さんはそれぞれすごく刺激的な活動をずっと続けられていますが、困ることもあると思うんです。どうしてもここは改善していきたいなど、経済的なことも含めて、今、抱えている問題があれば、一言ずつお願いします。

KN) 僕は求人サイトというメディアがあるので、全国各地から人が集まる場所でもあるんですが、もっとローカルの人に来てもらいたいという思いがあります。もちろん町会にも参加していますし、御神輿も担いでいるんですが、もっと近所の人とお付き合いしていきたいというのはありますね。清澄白河に来てからまだ2年ぐらいなので、これからじっくりやっていきたいなというところです。

ML) 例えば、香港ではもうこれ以上高騰しないように家賃を制限すると、より良い暮らしができるようになると思いますし、それに伴って香港の平均労働時間も減っていくのではないかと思います。そうすると、自分が楽しいと思うようなことに割ける時間も増えてくるはずです。国が良い方向に進んでいくと、周りの国もそれを見て都市計画においてもお互いに競争し合うような雰囲気生まれてくると思います。

FE) アリスさんの話の中で出た「個人主義と集団主義の共存」という考えは面白いですね。集団においては、個人の自由もありますし、集団としての責任もあります。金銭的な責任感もあります。それはシステム上の問題よりも、自分の想像とか自分の考えの問題だと思います。



AHC) 私もそう思います。お互いにシェアするという雰囲気をつくり出すこともできますし、自分の知識や経験もシェアすることもできると思います。ですが、特にアジアの近代社会の中では、自分たちの感情をあまりシェアしなくなっている傾向があると思います。

ですから、もっとこのような対話の場、オープンな雰囲気でも自分の気持ちを気楽に話せるような場を設けたいと思います。経験や技術などと同様に、感情的にもより成長していけるのではないのでしょうか。

このようなコミュニケーションをとることによって、力ももらえると思います。

来場者質疑応答

TS) せっかく今日、こうやって集まってくださっている皆さんとなるべく直に話し合う時間にしていきたいと思います。会場の皆さんで、質問のある方はいらっしゃいますか。

来場者A)

コミュニティの中に入って理想の形を追求していくという活動内容が面白かったのですが、一緒に仕事をしていた人たちと仕事をする中で、うまくいかなかったケースや、逆に一緒に協力することによってさらに悪くなったケースがあったのか、また、そういった困難に直面したときにどのように乗り越えたのでしょうか。

FE) そうですね、プロジェクト単位ではいろいろありますが、もう1つ、その中で難しいと感じることがあります。例えばそのコミュニティの中での多様性や政治問題に関する認識の違いがあります。政治に関して、私たちのグループの考え方とはちょっと違う認識を持っている人もいますので、時に衝突が起こります。社会というものを直すことはできませんが、対話できるような場を設けることでそのような問題が改善されていくのではないかと思います。長期的に考えながら対話を引き続き行って、その人たちとより親密な関係を築けるのではないかと思います。

ML) プレゼンテーションでも紹介した油麻地のリサイクルショップ屋台での話です。購入する際、自分で中古品に値段をつけるのですが、ある子どもが1ドルしか入れずに、欲しいおもちゃを取っていき、値段を自由に決めることについて、一緒にやる仲間から異論も出ました。その点について、徹夜で話し合いをしたことで妥協点もかなり見つけられました。活動の中で摩擦が生まれることもありますが、話し合うことによってそれを改善できます。

KN) 僕もそういう場を持っていますが、そもそもそういう場に来るのもハードルが高いという人もいます。そういう人たちが来られる場所も必要なんじゃないかなと思っていて。でもそういう人はなんとかその場所に来て、1人でポツンとして、なかなか話せないということが多くて。ですから僕も積極的に話しかけたり、本当にこつこつとそういう工夫をしています。話を聞いてみるといろいろなことが起きたり、何かが始まったりする。とにかくそこは仕組みでは解決できない部分なので、人力で対応しています。

AHC) 近所には年配の方が結構いらっしゃいます。オープンな食事会みたいなものを開催し、近所の方も招待するのですが、やんわりと断られます。もちろん強制するつもりはありませんが、どのようにすれば近所の方にも自由で気楽に参加してもらえるようなイベントがつかれるかということも考えています。

来場者B)

遊び心にあふれたプロジェクトがひとつひとつ面白いなと思いました。政府や政府機関の開発などに対抗したり、コミュニケーションを取る中で、何かおもしろい方法を見出そうとしているのであれば、そういう話を聞いてみたいなと思いました。

ML) まず、以前に作った小さな本の話をして。香港のある織物街で、店を営む人たちが立ち退かされて、家賃が政府によって8～10回ぐらい勝手に値上げされました。40年前からずっと続いている市場です。そこで、都市計画に従事する人や建築家、教授などさまざまな人たちと協力して、小さな緑色の本をつくりました。それを、コミュニティ・プランニング・プラットフォームへの提案書というふうに呼んでいます。私は一般に「zine」と称されるような冊子を作るのが結構好きで、例えばフィクションやさまざまな出来事について書き、発行していますが、あくまでそれらはごちんまりとしたものです。この本は政府に向けての提案でした。すると、政府の関係者がテレビの中でこの本を開いて見せながら、「政府のやるべきことはこの本がやってくれている」ということを言ってくれたことがありました。この緑の本は物として存在することによって、アイコンとして使えるわけです。PDFやパワーポイントというよりも、この実際の物体だったからこそ変化をもたらすことができたのではないかと思います。このプロジェクトでは、多くの忍耐や辛抱強さ、政府との会議が必要だったのですが、すごく長い過程にわたっていろいろ学びがあり、とてもポジティブな経験でした。

FE) ちょっと複雑な問題ですね。時に政府が私たちのクライアントとなることもありますし、そのプロジェクトによって変わると思います。都市計画をする側の一員として働くのも、1つの方法だと思います。例えばロンドンの中で都市計画のあり方を変えようとする大きな動きがあります。若者が持っているような考え方を取り入れようとしている動きです。でも、それは必ずしも今起こっている問題の解決につながるわけではありません。

グランビーに関して重要なのは、活動の中心は住民であり、私たちはただ手伝っているだけだという点です。ですから、その住民がどれぐらい主導権を握って動いているかというのもここで主張しておきたいと思います。グランビーの住民たちの情熱と深い関与があったからこそその成果だというのは大変重要なことです。その方々と出会って、私はすごく幸運でした。どのようにすればこのボトムアップをつくることができるかということが時に議論になりますが、もっと現状と向き合う必要があると思います。目先の結論を急ぐのではなく、既にあるものや、そこに居る人々の要望に対し、どうアプローチをするのかを考える必要があると思います。



来場者C)

私は東京に住んでいますが、だんだん木々が少なくなっていく状況を、すごく悲しく思っています。個人の力というのはとても弱くて、何もできないという思いが募ってしましますが、世界ではそうやって、芸術や音楽などのパワフルなツールを使って、どうにか世界をより良くしようとしていますよね。しかし、日本ではそういった風潮はちょっと弱いかなと思います。住民の暮らしや願いの本質に、どうすれば組織にいる人たちが気づき、行動してくれるでしょうか。

FE) その現状を把握していないので、どのようにすればとはとても言いにくいですね。この問題に関心のある人々のコミュニティとして、できるだけ集まって話し合うことが大変重要だと思います。

シェフィールドというイギリスの町があるのですが、そこには素敵な木がありました。でも、自治体が道をつくるために外部委託していろいろ開発しました。舗装道路のために彼らは木を切り倒し、街の景観を永遠に変えてしまいました。このことは参考にならないと思います。実に難しい問題です。

AHC) 私も同じ意見です。具体的な解決策とは言えませんが、この中で違うつながりを持っている人もいますし、いろいろなアイデアがそれで生まれるかと思います。そして、希望をなくさないように頑張ることが大事だと思います。そして、前向きな態度を保つことも大事だと思います。そうしつつ自分の今の活動や自分の考えをほかの人たちと共有することも。その共有するという行動の中にはパフォーマンスも含まれると思うのですが、マイケルさんもアーティストの話に言及していましたし、フランさんがやっている活動の中でも、私たちはアーティストとしてパフォーマンスをする中で人々の認識を高めることもできます。共有の力は団結を生み、それが変化につながります。その段階を信頼して、うまくいくことを信じていけば必ず、今すぐ形としてあらわれるのではなくても、いい変化をもたらせるのではないかと思います。その変化が大きくななくても、その中で新しい変化も必ず生まれます。

TS) 重要なお質問ですし、こういう質問をいただいただけでも、ここにいる皆さん、そういう悲しみを共有できたかもしれません。

2020年、またその先のことも考えて、東京という都市を魅力的なものにしていくには、やはりいろいろな発言をし、人の話を聞き、そして行動していかなければならないというところに来ていることは確かだと思います。